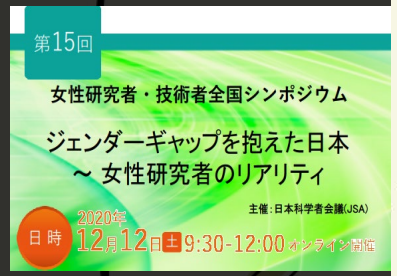
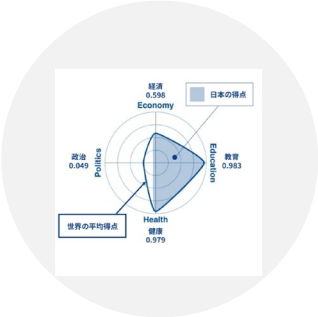
女性研究者とケア

岡野八代　同志社大学大学院教員



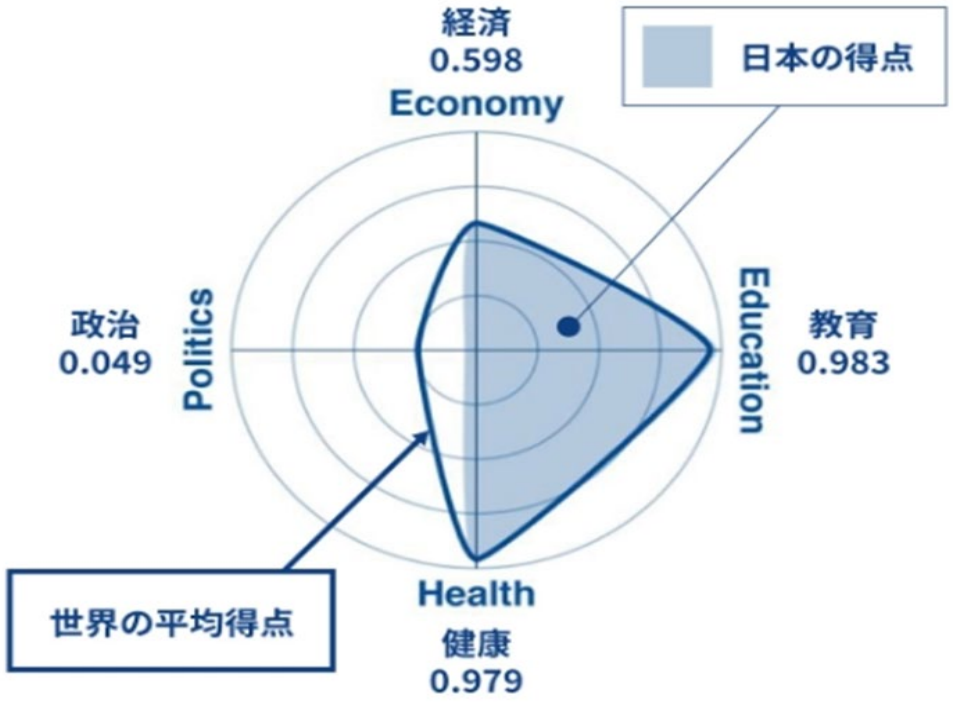
今日の内容



教育分野のジェンダー・ギャップと、わたしの経験

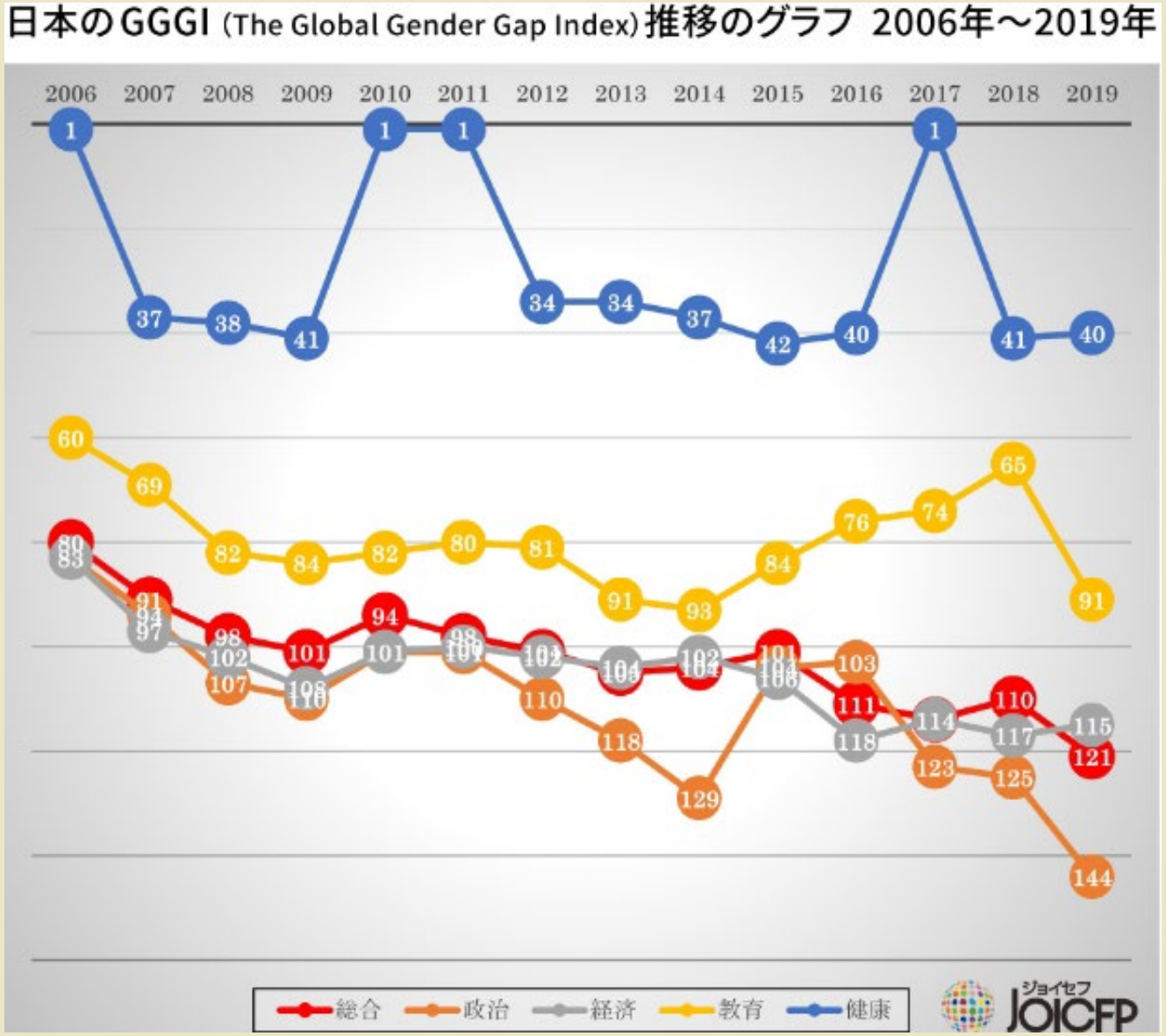
ケアとは？ケアの倫理とは？

ケア革命を！



分野	ギャップ指数	順位
政治	0.049	144位
経済	0.598	115位
教育	0.983	91位
健康	0.979	40位
総合	**0.652**	**121位**

ジェンダー・ギャップ指数 153カ国中121位 (2019年)



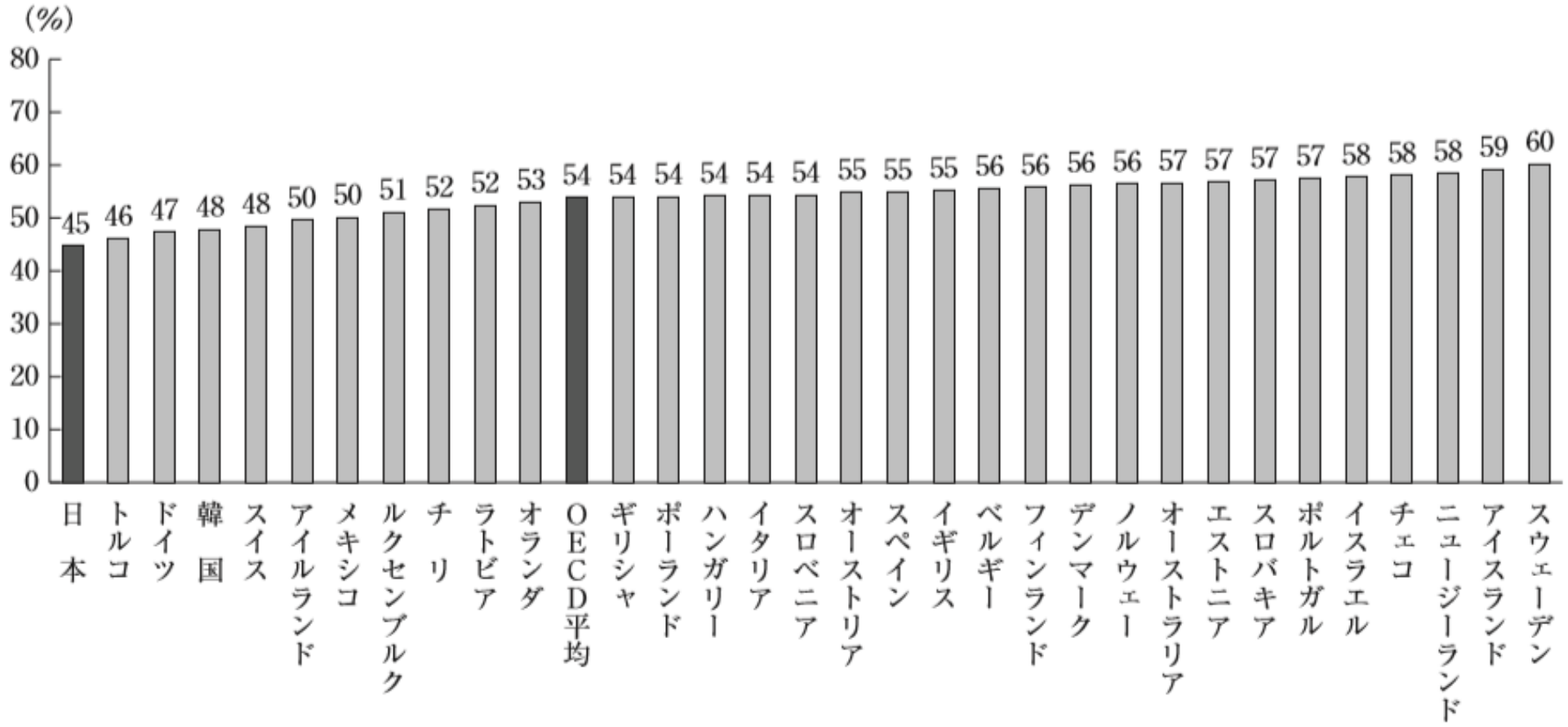
経済・政治の低さと、「意外な」教育の低さ

Ex. 2018年に発覚した、医学部受験における女性差別。

報道によれば、180点満点の試験で、男女の差を80点つけていたとも言われている。

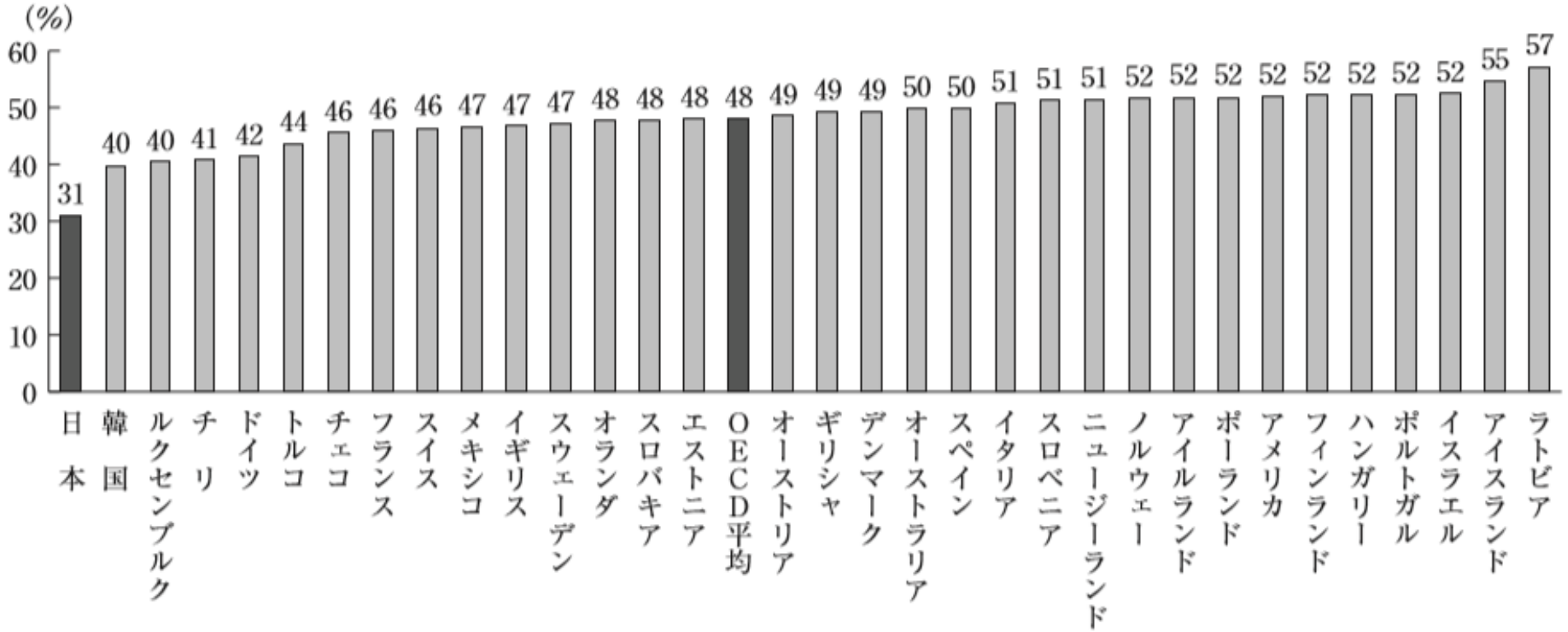
池本美香「女性の活躍推進に向けた高等教育の課題」『JRIレビュー』, vol.5, no.56 (2018)

（図表４）OECD諸国の大学（学部レベル）入学者の女性割合



（資料）OECD, Education at a Glance 2016 Table C3.3

（図表５）OECD諸国の大学院（博士レベル）入学者の女性割合



（資料）OECD, Education at a Glance 2016 Table C3.3

わたしは、研究者の道を選んだのか？
杉田水脈「「LGBT」支援の度が過ぎる」（『新潮 45』2018年)より

- 「生きづらさという観点でいえば、社会的な差別云々よりも、自分たちの親が理解してくれないことのほうがつらいと言います。親は自分たちの子供が、自分たちと同じように結婚して、やがて子供をもうけてくれると信じています。だから、子供が同性愛者だと分かると、すごいショックを受ける。これは制度を変えることで、どうにかなるものではありません。リベラルなメディアは「生きづらさ」を社会制度のせいにして、その解消をうたいますが、そもそも世の中は生きづらく、理不尽なものです」[杉田 58]。
- ＝前段はたしかに、実感に添う。最も信頼してほしい家族からの否定は、全人格にひびく。がしかし、それは、家族制度の問題に他ならない。
- 「例えば、子育て支援や子供ができないカップルへの不妊治療に税金を使うというのであれば、少子化対策のためにお金を使うという大義名分があります。しかし、LGBTのカップルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか」[ibid.]。
- 「「多様性の時代だから、女性（男性）が女性（男性）を好きになっても当然」と報道することがいいことなのかどうか。普通に恋愛して結婚できる人まで、「これ（同性愛）でいいんだ」と、不幸な人を増やすことにつながりかねません」[ibid.: 59]。
- 「「常識」や「普通であること」を見失っていく社会は「秩序」がなくなり、いずれ崩壊していくことにもなりかねません」[ibid.: 60]。

1993年に修士終了（東京）、93－96年留学（カナダ）、93-99年博士課程（大阪）、99年就職（京都）

- ＝一人で生きていかないといけない＋　一般の日本社会で社会人としては難しい　＋この社会の役に立つような人にはなりたくない
- 学部3年で、専門を決定したときには、就職活動はしないと決めていた。
- 西洋政治思想史ゼミのなかでは、学部、修士課程を通じて、唯一の女性。
- 6年間の教育のなかで、女性教員はゼロ。
- 日本にいる限り、政治思想史で自分がなにかできるとは思えない＋男性ばかりの環境が息苦しい＋セクシュアル・マイノリティとして
- カナダで初めて、フェミニストの女性教員、フェミニスト理論に出会う

＝「わたしと知－ －フェミニズムに出会って」
http://kaken.fem.jp/2020/11/16/article3/

- はじめて接する女性の研究者たちが選ぶ女性の手で書かれたテキスト、「政治」という考えかたそのものを考え直そうとする先生たちの熱い言葉に、わたしは、いまの社会を変えていこう、みなが当たり前と思っているものこそを疑おうという、生きた哲学者をみる思いでした。
- 彼女たちは、この社会の生き難さをはっきりと捉えるための言葉を探し、そのための知を訪ね歩く、知を愛し求める先輩でした。彼女たちは教師として、わたしに、「この社会」に役立つかどうかではなく、一人ひとりの生き方に力を与える知を作り上げなさい、言葉を獲得しなさい、そうすれば、「この社会」は変わるかもしれないことを教えてくれました。フェミニストたちの言葉はわたしにとって、その格闘の証でした。

フェミニストとして、個人的には避けてきた女性役割について考えざるを得なかった。

・フェミニズムにとっての大問題＝公私二元論。ところが、私は、一人でいることに決めたので、私的領域問題に悩まされることがなかった。女性にとっての私的領域とは、〈わたし〉の領域ではなく、誰かのために〈わたし〉が存在する場所？

・なぜ、ケアに関わる多くの労働は、無償あるいは低賃金なのか？

・社会が要請する「成人」を育てるには、誰の、どれほどの労力が必要か？

・資本主義にもっとも必要な労働力について、なぜ資本主義はこれほど冷淡なのか？

・そもそもなぜ、女性にケア役割が押し付けられてきたのか？

・ケア労働の多くは、市場価値がつきにくい＝公的にその価値が評価されるが、公的な場には、ケア実践をしたこともないような人ばかりがいるのはなぜか？

ケアとは？

- 思想的背景
- 60年代のフェミニストたちの運動から＝なぜ、法的に平等といわれながら、それでも女性たちの地位が低いだけでなく、「女のくせに」とその価値を貶められなければならないのか？
- マルクスの影響で、「再生産労働」概念を発見
- では、女性たちは「再生産労働」から解放されればよいのか？
- 社会は、自立した自己決定できる健康な成人ばかりではない＝「みな誰かお母さんのこども」
- 女性たちが担っている「再生産労働」は、労働なのか？

- ケアとは？
- ケアすることとは、わたしたちが直接的に諸個人を助けるためになすあらゆることと定義されよう。それは、彼女・かれらの命にかかわる生物学的ニーズを満たすこと、彼女たちの基本的な潜在能力を発展させたり、維持したりするために、そして、不必要で、あるいは望ましくない痛みや苦しみを避けたり、緩和したりするためである。それによって、彼女たちは、注視・応答・敬意に満たされながら、社会のなかで生き延び、成長し、働くことができるようになる[岡野　2020:10-11]。

ケアの倫理研究とは？ーー両義性をみつめて

- ケア実践（育児・介護・介助・看護ほか、生きるために必要なニーズに応える営み）にかかわるために、女性は抑圧されてきた/女性だから、社会的評価の低い労働へ追いやられる
- BUT
- その営みは、誰かが担わなければならず、またケアの受けては、必要なケアが受けられなければ生きられない ＝

・その営みには、ひとと社会にとって大切な心性・態度・関心を育む

＝Essential work!

・ケアの貴重さ・価値は、ケアした者にしか了解・理解されない。

・ケアの価値は、市場価値では測れない

・BUT

・社会のなかで最もケアされている者ほど、ケアされたありがたみを忘れることができる。

・ケアの価値を決める権力がある者たちは、ケア実践にかかわったことがない。

ケア実践から生まれ、育まれる知や価値観をめぐる研究＝ケアの倫理

- ケアという実践によって、ある道徳的、日常的技skillsが磨かれることになります。これがまさに、実践a practiceの意味するところです。たとえば、「関心をもつことcare about」は、わたしたちをより注意深くattentiveしてくれます。わたしたちが、未だ満たされていないニーズに目を向けなければならない時、さらに多くのニーズに気づき始めるでしょう。女性たちのシェルターで働いている人々は、その他の場所にもいる虐待の被害者たちを見つけるようになるでしょう。というのも、そうしたワーカーたちは、同種の問題にはより注意払うようになるからです。次に、「配慮することcare for」によって、わたしたちは、より責任ある/ 応答可能なresponsible存在になります。責任を引き受けることは、どのような時に責任が果たされ、あるいは誰も責任をとらないのかということに気づく目を養ってくれます。小学校の先生が次のように問うのは、あたかも第二の本性のようになっています。「誰か、お掃除当番をかってでてくれませんか」、と。なぜなら、先生たちはつねに、子どもたちの責任感について考えているからです。「ケアを提供すること」は、わたしたちをより有能にcompetentしてくれます。もし、わたしたちが親の血圧をチェックすることになれば、どうしたらよいのかを知る必要があります。能力とは、単に技術的な指標ではありません。それは、実践者の卓越さの指標にもなるでしょう。最後に、「ケアを受け取ること」で、わたしたちはより敏感に/ 応答的にresponsiveなるでしょう[岡野　2020: 30]。

ジェンダー構造が、こうしたケアを巡る矛盾を覆い隠している

- ジェンダー構造（男が担うべき役割と女性が担うべき役割をめぐる不平等・抑圧・暴力）を、個人の決定のようにみせかける装置
- 家父長制は、権力や財を一部の者に集中させる制度であると同時に、ケア実践を、社会的地位の低いものに集中させる。

＝社会にとって欠かせない営みであるにもかかわらず、権力や財を求めて人は、社会的地位の低い者（女性・外国人・奴隷）にその営みを強制し、そのうえで、その営みの価値を貶め（誰にでもできる、安易な仕事）、さらにそうした営みにかかわる人を、蔑む。

- しかし、わたしたちのほとんどの活動が、ケア活動だと考えてみたらどうだろうか？

「もっとも一般的な意味において、ケア実践は人類的な活動a species activityであり、わたしたちがこの世界でできるだけよく生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいるとみなされるべきだと提案したい。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、複雑な、生命を維持するための網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるものである』[ibid.: 24]

⇒ ケアという営みを曇りなきめでみること、ジェンダー批判的に読み解くこと

ケア実践から見いだされるケアの価値とは？

- ひとは、放置されることによって傷つく
- 力の強弱にかかわらず、脆弱な個を傷つけないという強い倫理が必要
- ニーズを見極め、変化に対応し、ケアを必要とする人の答えを待つ

社会はどう見えてくる？

・社会は、ニーズを抱えるひとを中心に、できている

・政治を成立させている人間の尊厳・価値は、ケアの営みのなかでひとが身につけ、実感していく

・政治とは、どうケア活動を配分し、ケア関係をどう社会に位置づけるかを決定している。

ケア革命を！『ケア宣言』（大月書店より、来春発売予定）

新自由主義のなかで、家族、地域社会、政治、そして地球が、ケアを求めているが、そのケアを手に入れない状況にある。

＝民主主義とは、ケアを中心に、ケアに対する責任をどうみなで担うかといった視点を中心に考えるべき

この世界は、ケアのなさ[無関心、無配慮、不注意、ぞんざいさ]が君臨する世界です。

どこから始めるべきか？＝これまで政治的議題から排除されてきたイシューを、政治に取り戻す！

白澤社刊行（2020年10月21日）

- 現代社会でわたしたち人間は、自分が本当に価値があると思うことに、時間を避けなくなっているが、それはおかしくないだろうか？

「学校に通う子どもがいる親たちは、学校の時間割と職場の労働時間にズレがあることを痛感しています。学校の時間は労働時間より短く、子どもたちは、夏中家にいるのです。学校に通う子どもたちにとって、自分たちの帰宅時間から、親が仕事から帰ってくる間の時間が、もっとも不安で、子どもたちがもっともトラブルに巻き込まれやすい時間なのです。金銭的に可能なチャイルド・ケアを手に入れにくい、貧しい親たちにとっては、この時間のズレはさらに深刻です。民主的な市民として、この学年歴や時間割の問題をどのように改善すべきかを、わたしたちが見つけ出すことができると考えてみてください。学校は、親たちが職場にいくより前に始まり、そして職場を出た一時間後に終わってもよいかもしれません。学校の休みは、職場の休みにそったものでもよいでしょう。とはいえ、仕事に課せられる要求を考えれば、いかにそうしたことを実現できるのでしょうか。たしかに、わたしたちは、もっと時間をかけ、だれがいつ働くべきかを、真剣に考えてみなければならないでしょう[岡野 2020: 33-34]。

最後に：ケアを中心とする社会では、研究の在り方もかわるのだろうか？

岡野八代

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

https://global-studies.doshisha.ac.jp/teacher/teacher/okano.html